

私の幼児教育論

——「ハヤイということ」の周辺——

南 館 忠 智

この小論で、わたし達のもつ「ハヤイということ」への意識、そこに潜む問題点について考えてみたい。まとまった考察を展開できるまでに至っておらず、結論めいた言い方など出来そうになりのだが、せめて今後への糸口なりとも見つけられたら、と思う。

初めから回り道になるけれども、「大きいということ」から入っていきこう。

。「大きいことは良いことだ」？

「大きいことは良いことだ」という表現が（一部の人が）によ

って）意識的に流されたことがあった。記憶は不確かなのだが、数年ほど前だったように思う。その時は、よくある「売らんかな」精神まるだしのキャッチフレーズの一つ、といった程度に受けとめ、時流の変化の中でしだいに耳にしなくなるとともに、忘れるともなく忘れかけていた。

それが、なぜか最近になって、妙に気になり出したのである。まずは、そもそもなぜこうした表現が生み出され、流されたのか。そして、これはどれだけの正当性を含みもつ表現であり得たか。正当性といえは、ここで少くとも二つの立場が区別されるだろう。言うまでもなく、作為的に流した側におけるそれと、流されたすなわち受けとる立場におかれた側からみたそれとである。

これらの疑問は、表現そのもの、およびその背景への、いわば直接的吟味を意味する。数年間という時の流れを経た今日、一つの歴史（風俗史？）的な出来事として捉え、これを位置づけ、意味づけることは可能と思われる。ところが、「氣になる」気持は、こうした分析が出来たとしても、それだけでは納まりそうにない。先ほどの直接的吟味と並んで、いわば間接的吟味とも呼ぶべき作業を落とすわけにはいくまい。

間接的吟味には、次のようなポイントが含まれるであろう。すなわち、すでに耳にしなくなつて久しい今日なお、あの出来事がある種の影響を残しているのではないだろうか。さらには、流す側が当初意図していなかった局面（例えば幼児教育の世界）にある表現をかぶせてみたら、どんな事態が生じることになるだろうか、等々。

。ぜひ再確認しておきたい事項

そんな吟味（とくに間接的吟味）など何の足しになる。要らぬおせっかい、と評されかねない、ささやかな気がかりに冒頭からこだわってきた。その理由は、

●一見無関係に思える事柄相互の間に、浅からぬ関連性が見い出されることが、少なからずあること

●それゆえ、一つの事柄の解明に際しても、より多角的な検討が望ましいこと

●そのためには、どんなささいな点をも粗雑に扱わず、大切に拾い起こす努力が欠かせないこと

●こうした作業を遂行させる原動力は、既存の発想法に固執しすぎない、柔軟な心であること

等の点を再確認しなかったからに他ならない。正直なところ、これらの点がキチンと確認されるなら、当面はこれで十分と思われる。先ほどの疑問の一つ一つに対する具体的な回答は、この際、必ずしも要らない。

こうした「方法論的側面への傾斜」は、ことさら声を大にして言う必要のない、しごく当然のことであるかもしれない。しかしながら、隠さずに言えば、これら一連の指摘が、幼児教育界のある部分に内在する孤高性（露骨には排他性）に対して感じるいささかの不満ないし不安と重なる、と思えてしかたのないことを告白しておく。

より良い幼児教育の営みは、例えば「園―家庭」という枠組で考えた場合、園が親の希望に迎合して（あるいはそれを先取りし

て)「新しい」やり方を無批判に採り入れようとしても実現されないと同様、園がこれまでのやり方を無反省のまま踏襲した上で、親をいくら「啓蒙」しても、やはり実現はむずかしからう。望ましい保育を「守る」にせよ「創る」にせよ、その第一歩は、日々展開している実践を絶えずチェックしつづける努力から始まる、と銘記すべきではあるまいか。

○「ハイイこと」のあらわれ方

さて、この辺で「ハイイということ」に戻ろう。いや、入ろう。このテーマは、「大きなことは良いことだ」について少しばかり考えをめぐらすうちに、何かそれ以上に根深く、重要な意味あいを秘めたもの思えてきたのである。

周知のとおり、わたし達の生活そのものが「時間」を無視してはほとんど成立しなくなりつつあるだけに、「ハイイということ」は生活のあちらこちらに姿をあらわす。それは、例えば「良いことか」という視点からすると、良いとされる場合、逆に悪いときとされる場合、あるいはどちらとも言いがたい場合など、その様相はヴァラエティーに富む。こうした事情は、幼児の生活においても

(原則的に)変わらない。

親として我が子に「一日もハヤク生活習慣を身につけてほしい」と願うのはごく一般的だし、「ハヤクさっさとしなさい!」と声をかけたことの一度もない親など皆無といって良からう。これとはやや異なる文脈で、「ネエ、新幹線って、とってもハヤイでしょう」と、げげんそうな顔つきの子どもにも、同意を強要している親も時おり見かける。このような、あらわな形で「ハヤイこと」が意識される場面は、だれの目にも珍しくないはずである。

この他に、明確に言語化などされない水準で、しかしながら明白に「ハイイということ」が含意されている場面も、決して少なくない。すでに触れた再確認事項に照らし合わせるとき、こうした水準で示されるケースは出来るかぎり丁寧に扱うのが好ましい。先日の教育実習で次のような場面に出くわした。

○「ハイイこと」の一つの実例

それは、年長組の幼児が「自分の思いどおりにボールをコントロールするには、どのように蹴ったらよいか、気づくようになす」ことを主たる目標とした指導であった。(ここで、この目標

設定の当否については、あえて問わないことにしよう)

一斉保育の形態の中で、三十五名の幼児達は日ごろの五つのグループに分かれ、各グループはそれぞれボールを受けとった。保育者としての教生は、手を使わずに足で蹴ること等の一般的注意を確認した後、まず自分で示範して見せ、それから子ども達の番となった。順ぐりにボールを蹴りながら進み、前方の旗を回って戻ろうとするのだが、なかなかうまくいかない。

一人四〜五回ずつ試みたとき、笛が鳴って、そこで教生からの問いかけ。(この問いかけが検討に値する問題を含んでいた。後に触れよう)この後、「上手に蹴っていた」二人の女のボールさばきを見てから、再びグループ単位で順ぐりに。先ほどと同じ程度繰り返したところで、「今度はグループの間で競争しよう」ということで競争が始まり、大変な声援の中で進行し、そして順次ゴールイン。各グループの順位を明らかにして(ここにも問題が)、それで終了。

以上が経過の概略である。この実践の目標が、子ども達が「よくコントロールしながらボールを蹴るポイントに気づく」点にあったことを想い起こそう。指導者は「足のどこで蹴ったら良いか」等と問いかける中で、(不用意にも)「もう少しハヤク回って来るには?」と口をすべらせている。「ハヤク」は、この場合、

適切な言いまわしといえるだろうか。

こうした目標の達成が往々にして困難に陥るのは、「ハヤク」の要因が「正確さ」の要因を蹴飛ばしてしまふからだと考えようである。このケースでは、これが保育者自身の中で(多分、意図的にはなく)生じてしまった。そしてさらに、ゲームの後の順位づけに際して、この傾向が増幅されたのであった。

。「ハヤク」ことへの傾斜」の強さ

知らず識らずのうちに「ハヤク」の要因を重くみている。ねらいからすれば、メインとは考えにくい要因が、最後にグループ競争の形を導入したことにより、実践全体の中で最も強調される結果になってしまったのではあるまいか。裏返して言えば、「ボールをうまくコントロールするための足の使い方」という、メインであるべきポイントが、五十分ほどの活動が終わった時点で、ほぼ完全に子ども達の上を素通りしてしまつたのではあるまいか。この点を、反省会の席上、提起してみた。反応の多くは、予想を越えて、実践者に好意的だった。いわく、やはり活動のしめくくりは、あのように、ゲームで盛り上げるのが良い。いわく、あ

ただけ長いこと練習をしたのだから、あれ以上続けるのは無理だ、等々。また、(提起の意味を、競争否定と捉えた上で?)ゲーム形式をもっとも採り入れる方が良い、とする見解も出された。

これらの見解に接してまず感じたのは、議論がズレている、ということだった。個々の見解に対して「忠実に」答えるとするれば、子ども達の熱気がしだいに高まり、ついに爆発する瞬間の必要なことを否定するつもりなど全くなく、五十分間をすべて「練習」で通せと主張するつもりもない。ゲームを多用することについては、今回とは別の観点からなら積極的に肯定して良い、とも思う。しかし、議論は微妙にすれ違っている。

提起のしかたに配慮が不足していた点は素直に認めるべきであろう。「ハヤサ」対「正確さ」という対比はあまりに図式的な割り切りであったし、説明も舌足らずであった。それにしても、と強烈に印象づけられたのが、わたし達に内在する「ハヤイことへの傾斜」の強さである。この次元が他の次元から明確に分離されぬまま、他の次元にひつつき、その中に入り込んでいる、という印象である。

。あいまいな「ハヤサのカテゴリ」

「ハヤイ」が殊更の問い直しも受けぬままに潜行あるいは横行している当然の結果かもしれない。この言葉は思いのほか多様の意味あいが使われており、それらをカテゴライズする適切な枠組みがまだ見い出されていないことに気づかされる。

もちろん、「ハヤイ」に、「早い」と「速い」の二通りの漢字が当てられることは、誰でも知っている。では、「早い」と「速い」は、どのような共通の基盤の上に、それぞれどのような固有性をもつのか、とたずねてみよう。どれだけ明快な、また一致した回答が期待できるであろうか。原則的には、「早い」は時の流れの上の、特定の一時点の位置に、「速い」は二つの時点間に認められる変容にかかわる概念のようである。「早い」が、いわば出発点を強く意識するのに対して、「速い」ではそれはとくに問われない。その代わり、「早い」では問題にされない、スタートした瞬間以後の状態に注目する。

ここまでの枠組みで処理できるケースは、もちろんある。「ハヤイ時期における生活習慣の確立」は「早」、「ハヤイ新幹線」は「速」であり、この程度までならさしたる異論もなからう。しかし、例えば「ハヤクさっさとしなさい」のケースはどうか。まだ

着手していない子に対しては「早」のようだし、すでに進行中となると「速」の方が近いようにも思われる。

ありていと言えば、この「早—速」という枠組みは、実際に「ハイ」という言葉が発した人がもつ枠組みをうまくカバーしていない、というべきであろう。その人の中には、「早」と「速」とに分化する以前の、より混沌としたカテゴリーしか存在しないのかもしれない。あるいは逆に、さらに分化の進んだ精緻なカテゴリーが用意されているのかもしれない。

。 「ハイ」ことへの価値づけ

人びとの間にみられるこうした食い違いの一端は、すでに明らかにされている。例えば「速さ」を理解する際に用いる基準性について研究したピアジェが、「距離」と「時間」との関係から「速さ」を導き出す（いわばおとなの）段階に達するまでに幾つかの段階を経る、と結論づけているのは周知のとおりである。それによると、幼児は一般に、距離や時間を前提とすることなく、「追いつく」「越す」の有無を判断の直接的な手がかりとして使う、とされている。

しかしながら、今日までに解明できた部分は「ハヤサ」全体からすれば、まさにごく一部分に過ぎない。「ハヤサ」自体と一応区別して、「ハイ」ということへの価値づけの分析となると、なおのこと、総合的考察が欠如している感が強い。

なるほど「早期」教育に限ってみれば、一方に積極推進派、他方にそれへの批判派が現に存在する。単純化のそしりを覚悟の上で、「早いことは良いことだ」と「早いことは悪いことだ」とが一つの土俵の上のぼっているかのようなのである。ところがその実、ガブリ四つに組んでの大相撲、には程遠い。小論の前半で触れた「柔軟な心」の不足がその最大の原因のように思われるのだが、いかがであろうか。

仮に先ほどの二分法を下敷きにするなら、もう一方の「速」に関しては、教育（保育）における能率主義の発想法その他が関連するのであろうが、とくに幼児教育の世界では（幸か不幸か）大きな問題点として意識されずにきた。しかし、早晚（いやおうなしに）意識せざるを得ない状況が生じてくるように思われる。

「ハイ」ということをめぐる諸問題がまったく成立しない（成立する必然性を失う）時こそ最良の時かもしれない、とも思いつつ、「ハイ」ということへの周辺をはいまわってみた。